# 学部留学生を対象にした「段階的アカデミック・ライティング」の導入

脇　田　里　子

## 1　はじめに

大学に入学した外国人留学生は、大学での勉学に対応するために、日本語の言語知識や運用能力といった一般的な日本語能力の他にも、大学生活での学びの技術を身につける必要がある[1]。それは、例えば、講義を理解し、ノートをとったり、レポートをまとめたりするなど大学特有の学びの技術である。舘岡（2002: 2）は、大学での勉学に対応するために必要なスキルとして、日本語の言語知識や日本語の運用力といった「一般的な日本語力」だけでなく、資料収集力、分析力、思考力、判断力、発表力、論文記述力などを挙げ、これらを「アカデミック・スキル（Academic skills）」とした。つまり、大学で必要となる日本語力は、「一般的な日本語能力」と「アカデミック・スキル」を合わせた総合的な日本語力である（舘岡, 2002: 2, 図 1 を参照）。よって、学部留学生を対象にした日本語科目の実践において、大学入学までに日本語学校などで学習した「一般的な日本語力」よりも、「アカデミック・スキル」を養成することが望ましい。

本研究は、外国人留学生の日本語力の中で、とりわけ、ライティングに着目する。学部留学生などを対象にした上級レベルのライティングは、「アカデミック・ライティング（Academic Writing）」と呼ばれる。アカデミック・ライティングは、二通他（2004: 285）によれば、「大学・大学院での学習や研究など学術的な目的のための文章およびその作成を指す。アカデミック・ライティングで目指す論理的な思考及び論理的な文章の書き方は、学術分野のみならず、学生の将来の社会生活や職業生活にも役立つものである。」と定義されている。アカデミック・ライティングの代表的な例には、レポート

『コミュニカーレ』4（2015）35－61
©2012 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会

や論文が挙げられる。なお、本研究では、「ライティング」、「書くこと」を用い、「作文」という用語は用いない[2]。

図2は、アカデミック・ライティングの構成要素を示している。二通他（2004）は、アカデミック・ライティングは「基礎」「専門」「言語」「技能」の4つの構成要素から成ると分析している。図1と図2の関係性に着目すると、図1の「一般的な日本語力」は図2の「言語」に、図1の「アカデミック・スキル」は図2の「技能」と「基礎」に、ほぼ対応していることがわかる。また、図2のアカデミック・ライティングでは、大学・大学院での専門教育を念頭においているため、「専門」の構成要素が示されている。

図3は、アカデミック・ライティングの学習及び実践の場を示している。大学入学前（中井他 2013）、学部前半の大学初年次（内藤他 2013; 佐藤・二通 1999; 佐藤 1993）、大学院入学前（村岡他 2009; 木戸 2010）を対象としたアカデミック・ライティングに関する理論的研究や実践研究は枚挙に暇がない。また、上級レベルの留学生を対象にしたライティングの教科書の多くは、一般的なレポートの書き方に関する指南書が多い（二通・佐藤 2003; アカデミック・ジャパニーズ研究会 2001 など）。しかし、図2の「学部前半～学部後半」に当たる学部2年次～3年次の学習段階で、初年次教育を終え、基礎的なライティングの知識を有しているが、専門課程での本格的な論文を書く前の段階を対象にした理論的研究や実践研究はあまり例がない。また、アカデミック・ライティングの初年次教育を終えただけで、すぐに評価の高いレポートや論文を作成できるわけではない。そこで、本研究では、レポートで使う表現や構成などの基礎的な知識を有するが、専門的なレポートを書き慣れていない文系学部留学生2年次を対象にしたアカデミック・ライティングを対象に、専門的なレポートや論文を書くための橋渡しとなる教育方法を提案することを目的とする。

筆者の教授経験から判断すると、この段階の日本語学習者は、2,000字程度の説明型レポート[3]は独力で作成できるが、4,000字以上の字数のレポート作成、そして、「論証型」レポートの作成は学習者自身の力だけでは作成が難しい場合が多い。この段階のアカデミック・ライティングの問題点として、「①レポートに相応しいテーマ選択」、「②長文レポートの作成」、「③適

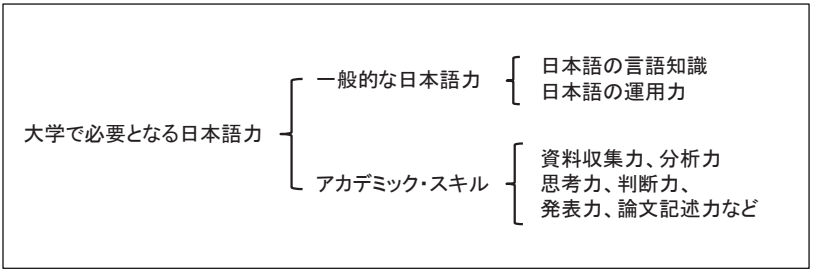


**図 1　大学で必要となる日本語力**

（舘岡 2002: 2 より引用）

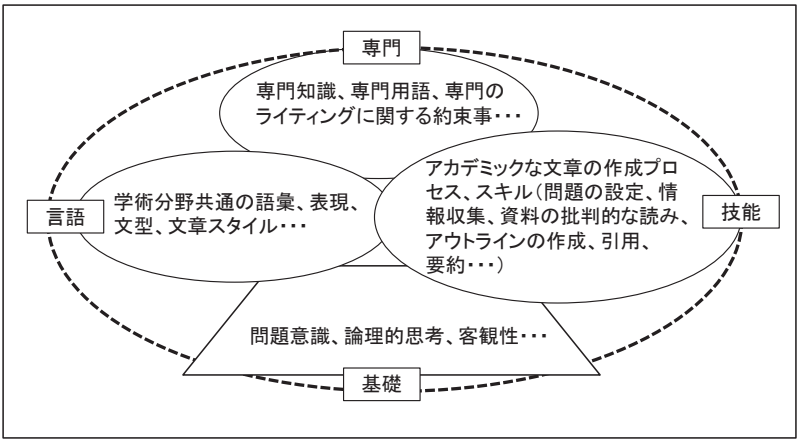


**図 2　アカデミック・ライティングの構成要素**

（二通他 2004: 285 より引用）

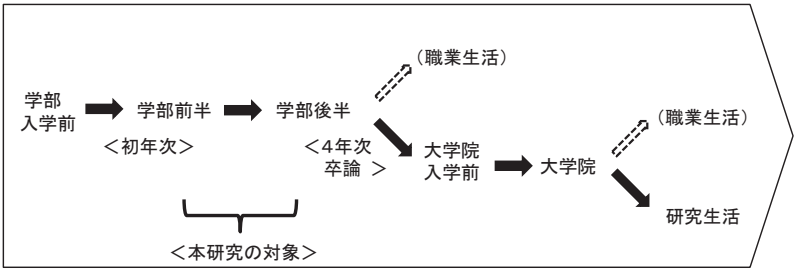


**図 3　アカデミック・ライティングの学習及び実践の場**

（二通他 2004: 285 より引用）　＜　＞部分は筆者による追記

切な論証」、「④適切な情報収集」、「⑤適切な引用表現」「⑥段落構成」などが挙げられる。本研究では、とりわけ、前述した①～③の課題を解決するライティングの教育方法を提案する。

あるテーマに関して、長文の「論証型」レポートが作成できるようになるためには、授業のはじめの段階から長文のレポートに取り組むより、1つのテーマの下で、レポートの字数やレポートの難易度を徐々に上げながらレポートを作成し、最後に、長文のレポート作成をすることが望ましいと考える。本研究では、このように徐々に難易度を上げていくライティングを「段階的アカデミック・ライティング」と呼ぶことにする。本研究では、基礎的なレポートの書き方の知識を有する学部留学生を対象に、卒業論文などの専門的なライティングへ導く目的を達成するために、「段階的アカデミック・ライティング」の手法を導入する。

本論文の構成は、第2章にて、本研究におけるレポートの分類を提示し、第3章にて、学部留学生を対象にした初年次アカデミック・ライティングに関する教育について述べる。そして、第4章にて、「段階的アカデミック・ライティング」を提案し、第5章にて、「段階的アカデミック・ライティング」の導入例を挙げる。最後に、第6章にて、結論と今後の課題を述べる。

## 2　レポートの分類

本章では、大学で求められるレポートの種類について述べる。レポートの分類は、研究者によって、若干、分け方が異なるが、レポートの目的や課題に応じて分類している点は共通する。次に、3つの先行研究によるレポート分類を示す。

まず、二通他(2003: 107)は、レポートを3つに分類している。二通他(2003)ではレポートの名称に関する記述が見られなかったため、筆者がレポート分類の名称として、「説明型」、「論証型」、「調査型」を付した。

①「説明型」レポート：ある主題について参考文献や資料などによって調べ、自分自身の考察を加えて説明するもの

②「論証型」レポート：ある問題についての自分の主張・見解・考察などを

客観的な根拠を示しながら、論理的に述べるもの

③「調査型」レポート：ある問題に関してインタビュー・アンケート調査・現地調査などを行い、その結果についての考察を述べるもの

ここで「論証」について補足説明をする。議論に関する学問分野において、論証の研究が進められている。学術的な議論は論証と呼ばれる。図4に示すように、論証には、「データ」、「主張」、「理由づけ（論拠）」の3つの要素が必要で、「データ」から「主張」を導き、その「データ」と「主張」を結びつける「理由づけ（論拠）」をもつ必要がある。図4では、「データ」と「理由づけ（論拠）」を合わせたものを「根拠」として捉えているので、「根拠」から「主張」を導くことが論証であるとも言える。また、福澤（2002: 99）も、論証を「ある主張をささえるためには根拠が必要であり、主張を理由とともに提示する言動」と述べている。このように、論証は根拠に基づいて主張をすることであり、論理的に物事を思考する上で、重要な要素である。よって、「論証型」レポートがうまく作成できることが専門教育課程への大切な橋渡しであると考える。

次に、二通他（2009: 3）は、レポート・論文のタイプを7つ挙げている。そのうち、レポートに関しては、次の2つのタイプを挙げている。

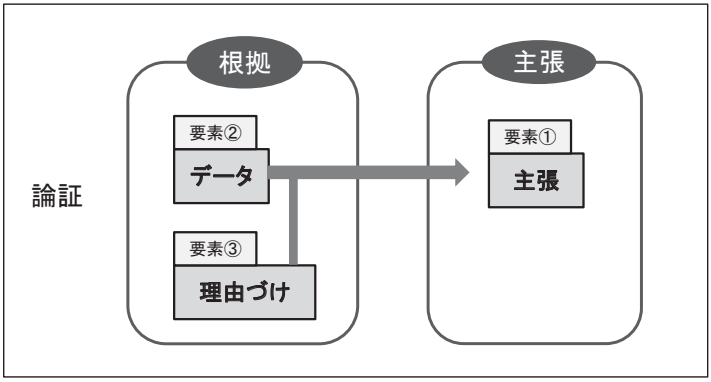


**図4　論証の構造**
（西部 2003: 43「議論の3つの要素」より引用）

①実験・調査レポート：実験・調査に基づくレポート
②論証型レポート：ある主張を根拠を用いて証明するレポート

この分類では、二通他（2003）の①説明型レポートが分類から削除されている。

最後に、井下（2013: 30）は、大学でのレポートの課題として、次の４種類を挙げ、レポートを分類している。

①説明型レポート：授業やテキストの内容を理解したかどうか説明する。
②報告型レポート：（臨床、教育）実習での成果を報告する。
③実証型レポート：仮説を検証するため、実験や調査を実施し、分析、考察する。
④論証型レポート：与えられた課題について、テーマを絞り込み、資料を調べ、根拠に基づき、自分の主張を論理的に組み立てて論証する。

井下（2013）の分類と二通（2003）との違いは、井下（2013）では臨床実習や教育実習を対象にした実習成果を報告する②「報告型」レポートが追加されていることである。本研究の主な対象である学部２年次生は、「論証型」レポートは十分に習得されていないため、必要性が最も高いと判断し、「報告型」レポートはほぼ習得されているため、必要性は最も低いと判断する。

以上、先行研究の分類をふまえ、本研究におけるレポートの分類は、二通他（2003：107）の３分類に依り、その一部をさらに分類する。本研究では、二通他（2003）の「論証型」レポートを２つに下位分類し、①「賛否型」と②「問題解決型」に分ける。表１に、本研究におけるレポートの分類と定義を示す。表１には、参考までに、論文の定義も付す。

**表１　本研究におけるレポートの分類と定義**

| | | | 定　義 |
|---|---|---|---|
| レポート | A説明型 | | ある主題について参考文献や資料などによって調べ、自分自身の考察を加えて説明するもの（二通, 2003:107） |
| | B論証型 | ①賛否型 | ある主題に関して賛成か反対、または、「～べき」か「～べきではないか」といった二者のうち一方の立場に立ち、その立場の根拠を示しながら、論理的に述べるもの |
| | | ②問題解決型 | ある問題に対して、その問題を解決する書き手の主張が提案され、その根拠を示しながら、論理的に述べるもの |
| | C調査型 | | ある問題に関してインタビュー・アンケート調査・現地調査などを行い、その結果についての考察を述べるもの（二通, 2003:107） |
| 論文 | | | レポートよりも内容に独自性があり、先行研究を踏まえ、自分の研究を位置づけ、新しい解釈や事実の発見などを議論したもの |

表１におけるA「説明型」レポートとB「論証型」レポートの共通点は、テーマについて文献や資料を調べて考察し、自分の意見を述べることである。しかし、A「説明型」レポートは調べたことの説明が中心であり、意見のオリジナリティは求められているわけではない。一方、B「論証型」レポートは、自分の意見を言明し、資料から得た自分の意見の根拠も示し、相手を説得するという点において異なる。

B「論証型」レポートは、本研究では、さらに２つに下位分類する。１つは、ある主題に対して「賛成か反対か」、「～するべきか、～するべきではないか」など、二者択一のどちらかの立場に立ち、自分の支持する立場を論じるB①「賛否型」レポートである。もう１つは、ある未解決の問題を主題に選び、その問題解決を提案するB②「問題解決型」レポートである。とりわけ、後者の「問題解決型」レポートは、学術的な普遍性を高めることができれば、「論文」へ発展することができる。よって、専門的な論文を書くための橋渡しとして、「問題解決型」レポートを上手く執筆できるように教育支援することが望ましいと考える。

C「調査型」レポートは、インタビュー調査やアンケート調査を行うなどして、自分で意見の根拠となるデータを収集する点が、参考文献などから根拠となる情報を収集するA「説明型」レポートやB「論証型」レポートと大きく異なる点である。C「調査型」レポートは、フィールドワークを行う人文社会系学部や、各種の実験を行う実験系学部などのレポートも含まれる。

**表２　レポートの分類とその特徴**

| | A　説明型レポート | B　論証型レポート | | C　調査型レポート | D　論文 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | ①賛否型 | ②問題解決型 | | |
| 目的 | 理解を報告 | 賛否の根拠を提示 | 問題解決とその根拠を提示 | 調査結果を報告 | 発見を検証 |
| 問い | 与えられる | 与えられる | 与えられる／自分で立てる | 与えられる／自分で立てる | 自分で立てる |
| オリジナリティ | 少ない | 少ない | 多い | 多い | とても多い |

（石黒 2012：4 表１の枠組みを利用して筆者が作成）

表２は、レポートの分類とその特徴に関して、(1) 文章を書く「目的」は何か、(2) レポートや論文の「問い」は誰が与えるのか、(3) レポートや論文の「オリジナリティ」はどの程度求められるのか、という３つの観点について、その相違点をやや強調する形で整理したものである。

表２から、論理的な文章は、A「説明型」、B①「賛否型」、B②「問題解決型」、D「論文」と進むにしたがって、難易度が高くなると言えよう。また、C「調査型」レポートは、主に、心理学や社会学などの分野において、書き手自身が実施した実験結果のデータ、インタビュー調査やアンケート調査などを実施した結果、そのデータを根拠として示す点が、B②「問題解決型」レポートとの違いである。したがって、ここでは、C「調査型」レポートの難易度のレベルは、B②「問題解決型」と同じ程度と位置づけている。ただし、C「調査型」レポートは、A「説明型」、B①「賛否型」、B②「問題解決型」と異なり、資料や参考文献をもとに説明や意見の根拠を示すものではなく、学習者の実施した調査データの質と量にその根拠を見出すため、一概に、B②「問題解決型」と同じレベルと断定はできない。例えば、C「調査型」レポートにおいて、アンケート項目数が少ない、アンケートの回答者が少ないなど、アンケート調査の質や量によっては、レポート作成の難易度は、B②「問題解決型」より低くなる場合も考えられる。

このように、レポートの種類によって、そのレポートにおいて、求められる目的、内容、オリジナリティの質が異なっていることがわかる。よって、教員が学習者にレポートの課題を提示する時に、テーマを与えて自由に論述

させるよりも、そのレポートの課題では、どのレポートのタイプで書くのかを明示すべきだと考える。この点については、第４章の「段階的アカデミック・ライティング」の概要にて述べる。次章では、初年次のアカデミック・ライティング教育の内容を概説し、初年次の学習を終えた段階で、学習者が長編の「問題解決型」レポート作成には困難が伴う場合があることを述べる。

## 3　初年次を対象にしたアカデミック・ライティング

本章では、学部留学生を対象にした初年次で扱われているアカデミック・ライティング教育の内容を概説する。一般的に、大学生活で必要となるレポートの書き方の基礎知識を学ぶことが多い。主な学習内容には、レポートに使われる文体、パラグラフ・ライティング（段落は主題文と支持文から成るなど）、文章構成（序論、本論、結論の役割と各論でよく用いられる日本語表現）、引用方法（学習者の意見と、文献の著者の意見を書き分ける）、特定の展開の組み立て方（歴史的経緯の説明、分類、仕組みの説明、比較・対照、因果関係など）などがある。そして、学習者はその学習内容に関する課題に取り組み、文章執筆の練習を行う。

次に、表３に、代表的な日本語ライティングの３つの教科書を挙げ、各課の具体的な課題を示す。表３から、各課の学習内容理解を確認するために、様々なテーマの課題が設定されていることがわかる。様々なテーマが設定されているのは、学部留学生の所属学部が多様であるため、学生の興味・関心も様々であるためと思われる。そして、教科書全ての課を終了する段階には、学習者はレポートの基本的な書き方に関する知識と運用能力を身につけていることが期待される。

しかし、こうした初年次のライティング教育を経た後に、学習者全員がレポートを上手に作成できるわけではない。特に、共通教育科目などにおいて長文のレポートや、「問題解決型」レポートが課された場合、何をどう書いていいのかわからないと言う学習者も少なくない。学部２年次の学習者のライティング力に関して、毎年、筆者が実施している学習者に対するアンケート調査（巻末の付録１）や、学習者が作成したレポートに対する教員の評価[4]から、次のような特徴が観察される。

## 表3　ライティング教科書における各課の課題

| 教科書 | 課 | 学習内容 | 各課の課題 | 字数 |
|---|---|---|---|---|
| A | 第8課 | 順序立てる | バイオマス | 指示なし |
| | 第9課 | 引用 | 日本の少子化問題 | 指示なし |
| | 第10課 | 資料の利用 | 就職しない若者 | 指示なし |
| B | 第1課 | 段落の構成 | 「貨幣には紙幣と硬貨があるが、2種類も必要ない。紙幣のみでよい。」に賛成、または、反対の意見を書く。3段落構成、はじめに意見、次にその理由、最後にまとめを書く。 | 400字程度 |
| | 第2課 | 仕組みの説明 | 資料を参考に、日本の国会の仕組みについて一段落の文章を書く。 | 300字程度 |
| | 第3課 | 歴史的経緯 | 「自分の大学の歴史」「自分が関心をもつ組織、機構の歴史」「自分が関心をもつ行事、祭りの歴史」から1つを選ぶ。第1段落に概要を書く。参考文献を書く。 | 3～4段落で600字程度 |
| | 第4課 | 分類 | （文章作成の課題ではなく、時事用語を分類する。） | |
| | 第5課 | 定義 | 「知的所有権」「循環型社会」「ヒートアイランド現象」のいずれかを選ぶ。内容は、語義の説明、具体例、それに関する自国、あるいは、日本の実情を述べる。参考文献を書く。 | 3～4段落で400字程度 |
| | 第6課 | 要約 | 新聞の投書か社説を要約する。 | 投書は100字<br>社説は300字 |
| | 第7課 | 比較・対照 | 指定されたグラフを見て、出産・育児が与える女性への就業への影響について、日米の実情を比較し、違いの要因を探る。 | 指示なし |
| | 第8課 | 因果関係 | 「少子化」「平均寿命の伸び」「海外旅行者の増加」から1つを選び、重要な要因を2つ選び、述べる。 | 指示なし |
| | 第9課 | 論説文 | （課題なし） | |
| | 第10課 | 資料の利用 | 官庁や民間機関のホームページから、情報の出所を明らかにし、データをまとめる。 | 指示なし |
| | 第11課 | レポート作成 | 自由テーマで、説明型か論証型でレポートを書く。 | 2,000字程度 |
| C | 第3課 | 課題の提示 | 小学校の学級崩壊に対する3人の意見をふまえ、論文の序論を書く。あるいは、自分の研究テーマに関して、問題点を提示し、問題解決方法を提示する。 | 指示なし |
| | 第4課 | 目的の提示 | ある実験の説明を読み、どのような研究を行うのかについて、論文の序論を書く。または、自分の研究テーマに関して、先行研究の問題点を指摘し、研究の目的を書く。 | 指示なし |
| | 第5課 | 定義と分類 | 行動パターンについて書かれた学生の講義ノートをもとに、行動パターンの用語を定義し、2種類の行動パターンについて説明する。または、自分の研究テーマに関して、重要な概念を取り上げ、それを定義し、分類し、その1つを考察の対象として選ぶ。 | 指示なし |
| | 第6課 | 図表の提示 | 仕事と余暇のどちらを重視するかの国際比較調査結果のグラフを見て、データの一部を説明する文章を書く。または、自分の研究テーマについて、調査や実験を行った結果を図表を使って説明する。 | 指示なし |
| | 第7課 | 変化の形容 | 「混雑率の推移」に関するグラフを見て、わかることを述べる。または、自分の研究テーマについて、調査・実験データや資料からわかることを述べる。 | 指示なし |
| | 第8課 | 対比と比較 | 「結婚観」に関するグラフを見て、男女の結婚観の違いについて述べる。または、自分の研究テーマについての調査・実験データからわかることを対比の文型を用いて説明する。 | 指示なし |
| | 第9課 | 原因の考察 | アジア観に関する国際世論調査の結果の図表を見て、このような結果が出た原因について述べる。または、自分の研究の調査・実験のデータからわかることを述べ、その事実が生じた原因について論じる。 | 指示なし |
| | 第10課 | 列挙 | 日本の玄関のドアが外開きである理由とその欠点についての資料を読み、それを文章の形にまとめる。または、自分の研究で、ある結果が出た原因、あるいは、ある判断をした理由を列挙する。 | 指示なし |
| | 第11課 | 引用 | 友人についての複数の見解を読み、論点を提示し、いくつかの見解を引用する。または、自分の研究テーマに関して、論点を提示し、その先行研究を引用する。 | 指示なし |
| | 第12課 | 同意と反論 | 3人の敬語に関する論述を読み、その中からいくつかを引用し、賛成か反対を述べる。または、自分の研究テーマに関する先行研究を引用し、それに対する意見を述べる。 | 指示なし |
| | 第13課 | 帰結 | 「老化」に関する資料をもとに、従来の説の紹介、用語を定義、調査結果をあげ、考察し、老化についての新しい説を提示する。または、自分の研究テーマについて、調査・実験の結果から判明したこと、考察したことに基づき、見解をまとめる。 | 指示なし |
| | 第14課 | 結論の提示 | 「ペアの社会空間」「結婚観」「21世紀のアジア」「敬語」「老化」の論文の結論部分について書く。または、自分の研究テーマについての論文の結論部分を書く。 | 指示なし |

ライティング教科書名
A 佐々木瑞枝他（2006）『大学で学ぶための日本語ライティング－短文からレポート作成まで－』The Japan Times
B 二通信子他（2003）『改訂版留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
C アカデミック・ジャパニーズ研究会編（2002）『大学・大学院留学生の日本語④ 論文作成編』アルク

**学部２年次当初のアカデミック・ライティング能力**

①序論・本論・結論で書くべき内容の理解

②説明型レポートの作成が可能

③ 2,000 字程度のレポート作成が可能

**学部２年次当初のアカデミック・ライティングの問題点**

①レポートに相応しいテーマ選択

②長文レポート作成（4,000 字以上）

③適切な論証（根拠から主張を導く妥当性、適切な根拠の提示）

④適切な情報収集（必要な情報の収集）

⑤適切な引用表現（学習者の意見と筆者の意見の区別）

⑥段落構成（段落内の構成、段落間の構成）

本研究では、とりわけ、上述したアカデミック・ライティングの問題点①～③を解決するライティング指導法として、次章にて、「段階的アカデミック・ライティング」を提案する。

## 4 「段階的アカデミック・ライティング」の概要

本章では、レポート・ライティングの基礎的な知識を有する学部２年次の留学生が、卒業論文や専門的なレポートの作成を目指した「段階的アカデミック・ライティング」の概要を述べる。

### 4.1　１つのテーマのもと、３種類のレポートを作成

学部生は学部の専門課程に進むにつれ、長文で、「論証型」のレポートが求められる。長文レポート作成が困難な学習者に、授業の最初から長文作成の課題を提示することは学習者にとって苦痛であり、現実的ではない。そこで、ライティングの授業では、レポートの字数や難易度を徐々に上げていくことが有効だと考える。もっとも、言語教育の観点から、易から難へ授業内容を配置することは珍しいことではない。本研究においては、レポートの大きなテーマを変えず、その１つのテーマのもとで、レポートの字数や難易度

を上げていくこと（「段階的アカデミック・ライティング」と呼ぶ）を強調したい。

1つのテーマの下で、字数や難易度を上げるライティング方法を提案する理由を述べる。まず、1つ目の理由は、筆者が過去に担当したライティング科目の教授経験を挙げる。授業では、学習者に、テーマが異なる2つのレポートを課した。その際に、2つ目のレポート作成にあたり、学習者の中には、テーマの決定や参考文献の収集に時間を要し、レポートの構成や執筆に時間を割けない者が見られた。また、他の授業では、同じテーマで、字数が異なる2つのレポートを課した場合もある。その場合には、多くの学習者は2つ目のレポート作成にあたり、1つ目のレポートで利用した参考文献を読み込み、類する参考文献を増やし、文章構成や内容についての推敲が増え、レポート評価に伸びが見られた。これらの経験より、1つのテーマに関して、複数のレポート課題を提示した方が学習者の思考を深めることができると考える。

そして、2つ目の理由は、表3のライティング教科書の各課の課題から述べる。表3において示したように、初年次のライティング教育では、学習者は、教科書の課ごとに、異なるテーマに関して文章を執筆している。そのため、レポートの表現などに関する断片的な知識は有しているが、テーマに関するレポート全体を通したライティングの運用能力はまだ習得できていないようである。そこで、あるテーマのもとで、レポート全体を通した運用能力を養成するためには、1つのテーマについて、繰り返し、文章作成する練習が有効であると考える。つまり、同じテーマのもとで、レポートの目的や観点を変えたレポートを繰り返し作成し、字数や難易度を上げていくことによって、そのテーマに対する理解やライティングの運用能力を伸ばすことができると考える。以上、2つの理由から、「段階的アカデミック・ライティング」を導入をする。

本研究では、専門課程で作成するレポートへの橋渡しとなるレポート作成を支援する。学習者は授業で4,000字（以上）の「問題解決型」レポート作成する前に、同一テーマに関する1,000字程度のアンケート調査報告、2,000字程度の「賛否型」レポートの作成を行う。このことから、第3章のアカデミック・ライティングの問題点で示した①「レポートに相応しいテーマ選択」

に関しては、「問題解決型」レポートのタイトルをまず想定し、〜問題に関する解決策を提案するようなテーマを選択することになるであろう。また、問題点②「長文レポート作成（4,000 字以上）」に関しては、はじめの段階では長文を作成できなくても、レポートの字数を徐々に増やしていくので、長文作成ができるようになるであろう。そして、問題点③「適切な論証（根拠から主張を導く妥当性、適切な根拠の提示）」に関しては、「賛否型」レポートを作成する際に、より単純な論証の方法を経験する。よって、「問題解決型」レポートの論証への橋渡しがより円滑になるのではないかと思われる。このように、「段階的アカデミック・ライティング」を導入することによって、3つの課題を解決できるのではないかと考える。

### 4.2　レポート課題提示と共に、レポート執筆の条件や評価方法の明示を

また、この「段階的アカデミック・ライティング」において、レポートの課題を提示する際に、具体的なレポート執筆の条件や評価方法を明示することも提案する。一般的に、教員が学習者にレポートを課す時には、レポートのテーマ、字数、提出締め切り日を提示することが多いが、それだけでは学習者にどのようなレポートが求められているのかという情報が不十分である。教員は学習者にレポートの目的を示し、そのレポートに求める具体的な条件として、例えば、賛否型レポートであれば、①学習者の立場に立脚した根拠を２つ示す、②学習者の立場に対する対立意見と反論を１つ示す、などの条件を示すことが望ましい。

そして、それらの条件を反映したレポートの評価方法をレポート執筆する前に、学習者に提示すべきである。例えば、学部の共通教育の授業などで、期末レポートとして提出されたレポートの多くは、学習者に返却されることがない。つまり、学習者は自分の作成したレポートがどのように評価されたのか、レポートの何が高く評価され、何が不足していたのかを知る機会がほとんどない。もちろん、学習者にフィードバックしたレポートを返却することが最も理想的である。しかし、それが不可能であるならば、レポートの課題提示と同時に、レポートの評価項目や評価基準をより具体的に示すことが望ましいと考える。

次章では、具体的な「段階的アカデミック・ライティング」の導入例を述べる。

## 5 「段階的アカデミック・ライティング」の導入例

本章では、「段階的アカデミック・ライティング」の導入例を示す。ここでは、文系学部２年次を対象にしたライティングの授業（1 回 90 分授業、週２回× 15 週）において、授業期間の前期（第１段階）、中期（第２段階）、後期（第３段階）、それぞれの段階にレポートを課す。第１段階から第３段階へと進むに従い、レポートの難易度が増し、レポートの文字数も増すように計画している。

### 5.1　授業計画

表４は、「段階的アカデミック・ライティング」の授業計画の例を示している。ここでは、はじめの３週間までにレポート全体のテーマを決定し、第１段階にて「調査型」レポート（簡易アンケートの調査報告）、第２段階にて「賛否型」レポート、第３段階にて「問題解決型」レポートを取り上げる。なお、表４において、第１段階と第２段階、第２段階と第３段階が、それぞれ２週間重複しているのは、進度の早い学習者と遅い学習者を配慮しているためである。

次に、「段階的アカデミック・ライティング」の３つのレポートに共通するテーマとして「新卒者の早期離職問題」を挙げた場合、各段階のレポートのタイトル例を以下に示す。

**表４ 「段階的アカデミック・ライティング」の授業計画**

<table>
<tr><th>授業週</th><th>1</th><th>2</th><th>3</th><th>4</th><th>5</th><th>6</th><th>7</th><th>8</th><th>9</th><th>10</th><th>11</th><th>12</th><th>13</th><th>14</th><th>15</th></tr>
<tr><td rowspan="4"></td><td colspan="4">テーマ選定</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="7">①（簡易アンケート）調査型</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td colspan="6">②賛否型</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td colspan="7">③問題解決型</td></tr>
</table>

**「段階的アカデミック・ライティング」のタイトル例**

共通テーマ：「新卒者の早期離職問題」

「調査型」レポート：「新卒者の早期離職問題に関する大学生の意識調査」

「賛否型」レポート：「新卒者の早期離職に反対」

「問題解決型」レポート：「新卒者の早期離職問題の解決方法」

このように、学習者がテーマを決定する際には、そのテーマにおいて、それぞれのレポートを完成させる見通しが立つかについて考慮する必要がある。とりわけ、「問題解決型」レポートが書けるテーマであるかを見極めることが重要である。つまり、そのテーマに関して、問題点を提起し、その問題を解決する提案を行うことができるようなテーマを選択することが重要である。また、1つのテーマの中で、3種類のレポートを書くことによって、じっくりとテーマに向き合い、学習者の理解や考えを深めることができると思われる。そして、各レポートに相応しいタイトルは何か、レポートの種類によって、どのように本論を展開していくべきかなども学習できよう。また、テーマが同じであることの利点として、レポートによって論じる観点が変わっても、同じ資料や参考文献を続けて利用できることが挙げられる。よって、学習者はレポートごとにテーマが変わる場合に比べ、情報収集に費やす時間を抑え、各レポートの中で、内容、構成、表現、語彙、文法などに割く時間が増えると考える。

### 5.2　3つのレポートの目的と字数

表5は、「段階的アカデミック・ライティング」における各レポートの目的と字数を表している。表に示した各レポートの目的や字数は、教員が学習者に周知する。このライティングの授業では、最終的に、第3段階の「問題解決型」レポートが4,000字（以上）で作成できることを目指している。しかし、その前に、2つのライティング段階を設け、徐々にレポートの難易度を上げ、最後に、「問題解決型」レポートに取り組む。

第1段階では、「調査型」レポート（簡易アンケートの調査報告）を1,000字程度でまとめる。初年次のライティング教育において、「調査型」レポー

**表5 「段階的アカデミック・ライティング」における目的と字数**

| | レポートの種類 | 目　的 | 字数 |
|---|---|---|---|
| 第1段階 | （簡易アンケート）調査型 | ① テーマに関する周囲の人の関心や意識を知る。<br>② アンケート調査方法を知る。<br>③ 表やグラフを使って報告する。 | 1,000字 |
| 第2段階 | 賛否型 | ① 立場に立って、論理的に意見を述べる。<br>② 簡単な論証を行う。 | 2,000字 |
| 第3段階 | 問題解決型 | ① テーマの中から解決すべき問題を提起する。<br>② 論証を行う。 | 4,000字（以上） |

トを扱うことはほとんどない。しかし、人文系においても社会言語学などの専門分野によっては、アンケート調査やインタビュー調査を行うことも有り得る。そこで、本実践では、本格的なアンケート調査ではなく、簡単なアンケート調査を取り入れる。簡単なアンケート調査とは、例えば、質問項目は10以内で、回答は選択式を中心にすること、大学生30名程度を対象にすることを想定している。そして、アンケート結果を集計し、それらを表やグラフを使って、わかりやすく表示し、調査結果に考察を加えたアンケート結果の報告書を作成する。この「調査型」レポートを作成する目的は「① テーマに関する周囲の人の関心や意識を知る。② アンケート調査方法を知る。③ 表やグラフを使って報告する。」ことである。

次に、第2段階では、「賛否型」レポートを2,000字程度でまとめる。「賛否型」レポートの作成目的は「① 立場に立って、論理的に意見を述べる。② 簡単な論証を行う。」ことである。「賛否型」レポートは、口頭表現のディベートを文章表現で再現したものとも言える。テーマに関して、賛成か反対か、あるいは、「～するべきか、～するべきではないか」といった立場に立ち、その根拠を述べていく。論証過程の中で、学習者の主張、すなわち、立場は、既に確定しているため、根拠を中心に考えるだけでよい。そうした意味において、目的を表す表現の中では「②簡単な論証」と表現している。そして、学習者と反対の立場に対し、対立意見を述べ、反論も行う。

最後に、第3段階において、4,000字（以上）の「問題解決型」レポートを扱う。このレポートを作成する目的は、「① テーマの中から解決すべき問題を提起すること、② 論証を行うこと」である。第2段階より、レポート

の字数が増えただけではなく、テーマの設定を学習者自身で行う点、論証において学習者自身で主張と根拠の組み合わせる点において、難易度が高くなる。

### 5.3　各レポート作成の条件と評価方法

表6は、「段階的アカデミック・ライティング」における各レポートの作成の条件と評価方法を示す。レポート作成前に、各レポートの条件や評価方法も学習者に周知させる。

第1段階では、「調査型」レポート（簡易アンケートの調査報告）を1,000字程度でまとめる。このレポート作成の条件は、「① アンケート票（A4サイズ2枚、質問項目10以内、選択肢による回答方法が多数）を作成し、アンケート調査（大学生30名）を行う。② 結果を集計し、表やグラフで表す。③ 集計結果を考察する。」である。そして、こうした条件を反映したルーブリック評価も学習者に示す。

レポートの評価項目や評価基準に関しては、そのレポートの評価を行う教員個人の裁量によるところが大きく、絶対的な評価基準は存在しない。語学教員がレポート評価を下す場合には、内容、構成、言語形式の3項目に関して、1～5などの数値による5段階評価を下すことが多い（石橋 2002; 49）。また、そうした評価項目があったとしても、事前に、学習者に評価項目や評価基準を知らせることは少ない。そこで、本研究では、アメリカ大学協会（AACE）や松下他（2013）が提案しているバリュー・ルーブリックを元に、レポートごとにルーブリックを作成し、レポート課題を与える時点で、学習

**表6 「段階的アカデミック・ライティング」におけるレポート作成上の条件と評価方法**

| | レポートの種類 | レポート作成上の条件 | 評価方法 |
|---|---|---|---|
| 第1段階 | （簡易アンケート）調査型 | ① アンケート票を作成し、アンケート調査を行う。<br>② 結果を集計し、表やグラフで表す。<br>③ 集計結果を考察する。 | ルーブリック<br>調査型 |
| 第2段階 | 賛否型 | ① 自分の立場を明示する。<br>② 立場を示す根拠を挙げる。<br>③ 自分の立場に対する対立意見を挙げ、反論する。 | ルーブリック<br>賛否型 |
| 第3段階 | 問題解決型 | ① 解決すべき問題を提起する。<br>② 書き手の解決案（結論）を示す。<br>③ 解決案（結論）の根拠を示す。<br>④ 解決案（結論）に対する対立意見を挙げ、反論する。 | ルーブリック<br>問題解決型 |

者に提示する。このように、レポート作成前に、レポートの評価項目や評価基準を明示することは、学習者にとっては、レポート作成段階での自己評価の目安となり、教員にとっても、評価項目や評価基準を明示しているので、評価しやすくなると思われる。

第２段階では、「賛否型」レポートを 2,000 字程度でまとめる。「賛否型」レポート作成上の条件は「① 自分の立場を明示する。② 立場を示す根拠を挙げる。③ 自分の立場に対する対立意見、反論を行う。」である。そして、こうした条件を反映したルーブリック評価も学習者に示す。

第３段階において、4,000 字（以上）の「問題解決型」レポートを扱う。このレポート作成する上での条件は、「① 解決すべき問題を提起する。② 書き手の解決案（結論）を示す。③ 解決案（結論）の根拠を示す。④ 解決案（結論）に対する対立意見、反論を行う。」である。そして、表７に、こうした条件を反映したルーブリック評価を示す。

表７は、「問題解決型」の日本語ライティング・ルーブリックの例である。表６において、レポートの評価項目は７つあり、各観点について、レベル０からレベル３まで４段階評価を行う。「問題解決型」レポート・ライティング評価の７つの観点とは、「問題と背景、主題と結論、根拠と事実・データ、対立意見の検討、全体構成、表現ルール、文法・語彙」であり、レポート作成の条件の他に、全体構成、レポートでの表現ルール、日本語文法や語彙の観点も含んでいる。

次に、表７のルーブリックの「背景と問題」の評価項目を例に、具体的にレベル段階について説明する。「背景と説明」の観点は、「与えられたテーマから自分で問題を設定する」である。この観点に関して、もっとも評価の高いレベル３では、「与えられたテーマから自分で問題を設定している。論ずる意見も含め[5]、その問題を取り上げた理由や背景について述べている。」と記述している。次に、レベル３より１つ評価の低いレベル２では、「与えられたテーマから自分で問題を設定している。その問題を取り上げた理由や背景について述べている。」と記述している。このように、レベル３では「論ずる意見も含め」ているが、レベル２ではその点を含んでいないことが相違点である。そして、レベル１は、「与えられたテーマから自分で問題を設定

## 表７　日本語ライティング・ルーブリック　（「問題解決型」レポート）

| 観点 | 問題解決 | 論理的思考 | | | | 文章表現 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 背景と問題 | 主題と結論 | 根拠と事実・データ | 対立意見の検討 | 全体構成 | 表現ルール | 文法・語彙 |
| 観点の説明 | ・与えられたテーマから自分で問題を設定する。 | ・設定した問題に対し、展開してきた自分の主張を関連付けながら、結論を導く。 | ・主張を支える根拠を述べている。<br>・根拠の真実性を立証する信頼性の高い事実・データを示す。*1 | ・自分の主張と対立する意見を取り上げる。<br>・それに対して論駁（問題点の指摘）を行う。 | ・問題の設定から結論に至る過程を論理的に組み立て、表現する。 | ・研究レポートとしてのルールを守る。 | ・文法上の誤りがなく、意図したことを適切な語彙を使用し、日本語で意思伝達できる。 |
| レベル３ | ・与えられたテーマから自分で問題を設定している。<br>・論ずる意見も含め、その問題を取り上げた理由や背景について述べている。 | ・問題に対し、主張を関連付けながら、結論を導いている。<br>・結論は一般論にとどまらず、独自性がある。 | ・根拠を述べている。<br>・根拠となる事実・データが２つ以上示されている。 | ・自分の主張と対立する意見を２つ以上取り上げている。<br>・それら全てに対して、論駁（問題点の指摘）を行っている。 | ・問題設定から結論までが論理的に組み立てられている。<br>・記述の順序、段落と段落のつながりがよい。 | ・指定されたフォーマットを使い、レポートの文字数が守られている。<br>・引用部分と自分の文章の区別を明示している。レポートの最後に引用文献を書いている。 | ・文法上の誤りがほとんどない（助詞、動詞の活用など）。<br>・レポートにふさわしい文体（だ、である体）・語彙・表現が使える。自分の言いたいことが意思伝達できる。 |
| レベル２ | ・与えられたテーマから自分で問題を設定している。<br>・その問題を取り上げた理由や背景について述べている。 | ・問題に対し、主張を関連付けながら、結論を導く。 | ・根拠を述べている。<br>・根拠となる事実・データが１つ示されている。 | ・自分の主張と対立する１つの意見を取り上げている。<br>・それに対して論駁（問題点の指摘）を行っている。 | ・問題設定から結論までが論理的に組み立てられている。<br>・記述の順序、段落と段落のつながりが大体よい。 | ・１つの段落は１つの内容でまとめる。段落に中心文と支持文がある。<br>*2 | ・１文の長さが長すぎない（60字以内）。修飾・被修飾の関係が明白である。主語と述語が対応している。<br>*2 |
| レベル１ | ・与えられたテーマから自分で問題を設定している。<br>・その問題を取り上げた理由や背景の内容が不十分である。 | ・結論を述べているが、主張との関連が不十分である。 | ・根拠を述べている。<br>・根拠となる事実・データが明らかではない。 | ・自分の主張と対立する意見を取り上げている。<br>・それに対して論駁（問題点の指摘）を行っていない。 | ・問題設定から結論までのアウトラインがたどれる。<br>・記述の順序や段落と段落のつながりがよくない。 | | |
| レベル０ | ・与えられたテーマではない問題設定になっている。または、問題設定が曖昧である。 | ・結論が述べられていない。あるいは、結論が曖昧である。 | ・根拠を述べていない。 | ・自分の主張と対立する意見を取り上げていない。 | ・問題設定から結論までのアウトラインをたどることが難しい。 | ・上記の３つのどれにも該当しない。 | ・上記の３つのどれにも該当しない。 |

松下佳代他（2013）「VALUE ルーブリックの意義と課題－規準とレベルの分析を通して－」、第 17 回大学教育研究フォーラム、発表資料を参考に加筆・修正

*1　信頼できる事実・データとは、大学、公的機関、学会、新聞など公共性・信頼性の高い情報を指す。一方、匿名など作成者名がない情報、個人のブログなどは、信頼性が低いと判断される。
*2　３つの条件をすべて満たす場合は「レベル３」、２つの場合は「レベル２」、１つの場合は「レベル１」と、満たさない場合は「レベル０」とみなす。

している。その問題を取り上げた理由や背景の内容が不十分である。」と記述している。レベル２では、理由や背景を述べているが、レベル１では、その内容が不十分と判断する場合である。最後に、レベル０では、「与えられたテーマではない問題設定になっている。または、問題設定が曖昧である。」である。つまり、レベル１では、問題設定の理由や背景が不十分であったが、レベル０では、問題設定がテーマ外である、あるいは、曖昧である場合としている。このように、各レベルの評価では、隣接するレベルとの差が何であるのかを記述している。

ルーブリック評価では、そのレポートが各観点のどの段階であるのか、その記述を読んで、評価者が判断する。よって、ルーブリック評価は、教員による評価だけでなく、学習者による自己評価としても、評価しやすいと思われる。

なお、「段階的アカデミック・ライティング」導入において、想定される問題点として、次の２つが考えられる。１つ目は、授業時間が計画通り確保できず、短くなる場合である。今回の導入例では、授業時間は週２回型授業を 15 週実施するとして、授業計画を立てている。もし、週１回型授業を 15 週実施するのであれば、「段階的アカデミック・ライティング」は３段階から２段階に縮小するなど、計画の縮小は余儀なくされるだろう。２つ目は、ライティング･ルーブリック評価の作成に関してである。日本では、まだ、ルーブリックによる評価はまだ普及しておらず、日本語のライティング・ルーブリックの研究も緒に就いたばかりである。そのため、評価項目や評価レベルの基準について、検討を続けていかねばならない。本研究では、「問題解決型」のルーブリックを表７に例示しているが、この評価項目や評価レベルが適切かに関して、実践を重ね、検討していく必要がある。

## 6　まとめ

本章では、「段階的アカデミック・ライティング」の導入についてまとめ、今後の課題を示す。本研究では、主として、文系学部留学生２年次を対象にしたアカデミック・ライティングを対象にした。学部留学生２年次はレポートで用いる表現や構成などの基礎的な知識を有するが、4,000 字以上といっ

た長文のレポート作成、そして、「論証型」レポートの作成は学習者自身の力だけでは難しい場合が多い。そこで、本研究では、こうした問題点を解決するためのライティングとして、「段階的アカデミック・ライティング」を提案した。

「段階的アカデミック・ライティング」とは、1つのテーマのもと、レポートの字数やレポートの難易度を徐々に上げながらレポートを作成する過程を経て、最後に、最終目的のレポートを作成することである。学習者があるテーマに関して、長文の「論証型」レポートが作成できるようになるためには、授業のはじめの段階から長文のレポートに取り組むより、「段階的アカデミック・ライティング」を取り入れ、最後に、目的の長文レポートを作成することが望ましいと考えている。

次に、具体的な「段階的アカデミック・ライティング」の導入例を示した。ライティングの授業（1回90分授業、週2回×15週）において、授業期間の前期（第1段階）、中期（第2段階）、後期（第3段階）、それぞれにレポートを課す計画を示した。まず、授業全体を通して、3つのレポートに取り組むことができる大きなテーマを決定する。そして、そのテーマのもとに、第1段階にて「調査型」レポート（簡易アンケートの調査報告）、第2段階にて「賛否型」レポート、第3段階にて「問題解決型」レポートを作成する。授業では、最終的に、第3段階の「問題解決型」レポートを4,000字（以上）で作成することを目指している。しかし、その前に、2つのライティング段階を設け、徐々に、字数やレポート作成の条件の難易度を上げながら、最後に、「問題解決型」レポートに取り組む。このような「段階的アカデミック・ライティング」を導入することによって、学部2年生次の課題である長文で「論証型」レポートの作成が可能となり、レポートに相応しいタイトルを選ぶことができることを期待している。

また、このライティングの特徴の1つは、教員が学習者にレポートの課題を提示する際に、各レポートの目的、字数、レポート作成上の条件、評価方法を明示することである。教員がレポート課題を示す際には、テーマ、字数、提出締め切り日といった漠然とした指示だけではなく、レポート作成上の条件をもっと具体的に与えるべきだと考える。そして、そのレポートの評価方

法（評価項目や評価基準）についても、事前に学習者に伝えておく方が、学習者は提出前にライティングの自己評価が可能になり、ライティングの意識を高めると思われる。

なお、本研究のレポートの評価方法は、ルーブリック評価を採用している。ルーブリック評価は、評価の観点と評価レベルが記述されているため、5段階評価などの数値評価と比べ、評価者によって評価基準が大きく異なることは少ないと思われる。さらに、学習者が自分のレポートを自己評価や見直しをする際にも、評価基準について具体的に記述されているため、評価や見直しがしやすいと思われる。

今後の課題は、本研究で提案した「段階的アカデミック・ライティング」をライティングの授業で実践することである。そして、その結果を分析し、想定している成果が見られるのか、うまく導入できないところがあれば、それはどのようなところかを考察したい。

## 注

1　財団法人日本国際教育協会が実施している留学生対象の大学入試「日本留学試験」において、日本語科目を出題する目的として「日本の大学での勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）を測定する」としている。大学で勉学するために必要とされる日本語は「アカデミック・ジャパニーズ」と表現される場合もある。

2　「作文」は自分が思ったことや感じたことを書くことで、その思ったことや感じたことの裏付けがなくても問題がない（井下, 2013: 8）ためである。「作文」は、日本語教育では初級から中級レベルの「書き」で、また、日本の学校教育では初等中等教育の国語科教育で用いられている。なお、先行研究において、研究者が「作文」という用語を使っている場合は、そのまま「作文」と表記する。

3　「説明型」レポートや「論証型」レポートに関しては、第2章「レポートの分類」において詳述する。

4　評価方法には、教員による評価の他に、学習者同士がお互いのレポートを評価するピア・レビューによる評価もある。学習者によっては、他の学習者のレポートをA～D評価することにためらいが見られる場合がある。そのため、授業実践では、学習者は他の学習者が作成したレポートを読み、

良かった点、勉強になった点、分かりにくかった点、改善すべき点などについて、コメントするようにしている。

5　ルーブリック表において、各レベルの評価観点において、前後のレベルとの相違する箇所に下線を引いている。本文では、ルーブリック表の記述に下線部があるものは、下線部を付けて引用している。

## 参考文献


アカデミック・ジャパニーズ研究会編（2001）『大学・大学院留学生の日本語②作文編』アルク

アカデミック・ジャパニーズ研究会編（2002）『大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』アルク

石黒圭（2012）『この1冊できちんと書ける論文・レポートの基本』日本実業出版社

石橋玲子（2002）『第2言語習得における第1言語の関与－日本語学習者の作文産出から－』風間書房

井下千以子（2013）『思考を鍛えるレポート・論文作成法』慶應義塾大学出版会

木戸光子（2010）「書き換えに着目した上級日本語作文の授業－新聞記事から要約文への文章構造の言い換えを例にして－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第25号, pp.107-122.

佐々木瑞枝他（2006）『大学で学ぶための日本語ライティング－短文からレポート作成まで－』The Japan Times

佐藤勢紀子（1993）「論文作成をめざす作文指導―目的に応じた教材の利用法―」『日本語教育』第79号, pp.137-147.

佐藤不二子・二通信子（1999）「留学生に対するアカデミック・ライティング教育－1年間の指導内容と今後の課題－」『経済と経営』第30巻、第2号、pp. 285-315. 札幌大学

舘岡洋子（2002）「日本語でのアカデミック・スキルの養成と自律学習」『東海大学紀要留学生教育センター』第22号, pp.1-20.

内藤真理子・小森真理（2013）「どんな手助けがあればレポートの自己修正ができるのか－マーカー機能とコメント機能を使った作文指導の実践報告－」『専門日本語教育研究』第15号、pp.41-46.

中井陽子・鈴木孝恵（2013）「レポート作成と口頭発表を連携させたクラスにおける学習活動と学習項目の分析 －留学生に対する予備教育を例に－ 」『2013

年 WEB 版「日本語教育実践研究フォーラム報告」』日本語教育学会
西部直樹（2003）『「議論力」が身につく技術』あさ出版
二通信子・佐藤不二子（2003）『改訂版留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
二通信子・大島弥生・山本富美子・佐藤勢紀子・因京子（2004）「アカデミック・ライティング教育の課題」『2004 年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.285-296.
二通信子・大島弥生・因京子・佐藤勢紀子・山本富美子（2009）『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会
福澤一吉（2002）『議論のレッスン』NHK 出版
松下佳代他（2013）「VALUE ルーブリックの意義と課題－規準とレベルの分析を通して－」、第 17 回大学教育研究フォーラム、発表資料
村岡貴子・因京子・仁科喜久子（2009）「専門文章作成支援方法の開発に向けて－スキーマ形成を中心に－」『専門日本語教育研究』第 11 号、pp.23-30.

## 参考 Web（2014 年 10 月 20 日アクセス）

VALUE Rubric Development Project, Association of American Colleges and Universities（バリュー・ルーブリック部門プロジェクト、アメリカ大学協会）https://www.aacu.org/value/rubrics

## 付録１　ライティングの授業開始時のアンケート

年　　月　　日

年度　「日本語ライティング２」　授業開始時アンケート

学生 ID：＿＿＿＿＿＿　氏名：＿＿＿＿＿＿

1　今までに作成した字数の多い日本語のレポートについて教えてください。

| レポートの題名 | 字数 | 授業名 | 先生からのコメントの有無（○・×） |
|---|---|---|---|
| ① | | 日本語ライティング１ | |
| ② | | | |
| ③ | | | |

2　いいレポートとはどのようなレポートですか。あなたの考えを述べてください。

3　あなたが今までに授業で受けた「読解」の授業はどのような内容でしたか。該当するものに○をつけてください。その他の活動があれば、その他に記入してください。

新出単語　・　本文全体を読む　・　文型導入　・　文型の使い方の練習　・

内容理解問題　・　内容に関する話し合い　・　その他（　　）

4　レポートを書くために文献や資料を読む必要があります。文献や資料を読む時に、どんなことに注意して読んでいますか。

5　レポートを書く時、文章構成に関して、どのようなことに注意して書いていますか。

6　この授業に期待していることを書いてください。

7　日本語の文章を書く力としてあてはまる数字を選んでください。

⓪あなたは文章を書くことが好きですか。（日本語でも母語でもどちらでもいいです。）

1　好き　　2　やや好き　　3　普通　　4　あまり好きではない　5　好きではない

①長い文章（4,000 字、原稿用紙 10 枚以上）を書くこと

1　よくできる　　2　できる　　3　普通　　4　ややできない　　5　できない

②-1　文章構成の方法（序論、本論、結論で何を書くべきか）

1　よくできる　　2　できる　　3　普通　　4　ややできない　　5　できない

②-2　段落構成の方法（段落の機能、中心文と支持文、段落と段落の関係）

1　よくできる　　2　できる　　3　普通　　4　ややできない　　5　できない

③レポートにふさわしいテーマを選ぶこと

1　よくできる　　2　できる　　3　普通　　4　ややできない　　5　できない

④テーマについて、自分の意見やアイディアを出すこと

1　よくできる　　2　できる　　3　普通　　4　ややできない　　5　できない

⑤自分の意見と他人の意見を正しく書き分けること（正しく引用できること）

1　よくできる　　2　できる　　3　普通　　4　ややできない　　5　できない

⑥テーマに関する参考文献を調べること（調べる方法を知っていること）

1　よくできる　　2　できる　　3　普通　　4　ややできない　　5　できない

⑦日本語で自分の考えをまとめること

1　よくできる　　2　できる　　3　普通　　4　ややできない　　5　できない

⑧語彙・文型などを正しく使うこと

1　よくできる　　2　できる　　3　普通　　4　ややできない　　5　できない

⑨日本語の表記法（段落の始め方　、　。「　」等の使い方）を正しく使うこと）

1　よくできる　　2　できる　　3　普通　　4　ややできない　　5　できない

⑩話し言葉と書き言葉の区別（レポートで使う言葉や表現がわかる）

1　よくできる　　2　できる　　3　普通　　4　ややできない　　5　できない

⑪いい（評価される）レポートのイメージがある

1　ある　　2　ややある　　3　あまりない　　4　ない

8　レポートを書く時どんなことが難しいですか、上の①～⑩から３つまで選んで下さい。

そして、どのような点がレポートを書く時に難しいか、具体的に説明してください。

（　　）（　　）（　　）

# Introduction to "Graded Academic Writing" for Undergraduate Overseas Students

Riko WAKITA

**Keywords:** Graded Academic Writing, Japanese Writing Education, Report Writing, Pros and Cons Type Report, Problem-Solution Type Report

This paper is a proposal for "Graded Academic Writing (GAW)" for undergraduate overseas students studying Japanese. GAW refers to a type of academic writing for second-year undergraduate students, and there has not been much previous research in this field. These students have problems of academic writing including written reports longer than 4,000 characters and writing an argumentation-type (problem-solving) report. Therefore, in order to solve these problems, I have introduced "GAW" to their Japanese writing class.

In "GAW", the number of characters increases every time students create a report in Japanese, and the conditions of report writing become more difficult. Next, I introduce specific examples of "GAW". In a twice-weekly 15-week course, the teacher assigns a report in the first, second, and third phases respectively. First, throughout the entire class, students determine the themes that can be addressed in the three reports. They create a "survey type" report (report on simple questionnaire) in the first phase, a "pros and cons" type report in the second phase, and a "problem-solving" report in the third phase. The in-class aim is to ultimately create a report of 4,000 characters (or more) in the third phase a "problem-solving" assignment. However, before that, I assign two other writing assignments in order to provide a bridge to the "problem-solving" reporting. By introducing such a "GAW", I hope to improve overseas students' problems in academic writing.